



手をつなごう、子どもたちのころと

ACC News Letter

危機の子どもたち・希望

April 2009



(カンボジア プレイダムレイクラウ小学校の児童たち)

ACC ニュースレター第 21 号 目次

ACC News Letter Vol. 21

- ・ セルビア スタディ・ツアー 報告
- ・ カンボジア 「ともだち未来便・2008」 報告
- ・ *Young Hopes* 活動報告
- ・ ほうこく・いろいろ



セルビア スタディ・ツアー報告

今年もまた ACC スタディ・ツアーの季節がめぐってまいりました。2月28日に日本を出発し、3月16日帰国と例年より長く日程をとった第8回目となる今回は、セルビアに加え、ボスニアも訪問致しました。二カ国に及ぶスタディ・ツアーは2002年の第1回以来のことです。また、昨年独立宣言をしたコソボにも赴き、ACCとは縁の深いエンクレーブ（少数民族の居住区、コソボでは圧倒的少数派のセルビア人居住地域をさす）、グラーツェ村の聖サバ小学校の子どもたち、先生方との再会もありました。

今回のスタディ・ツアーでも、島根県美郷町立邑智中学校、児童養護施設あけの星学園、同じく児童養護施設クリスマス・ヴィレッジなどで、ACCの若い力、Young Hopesが中心になって行ってきた「風の船」プログラムのワークショップ作品が大きなテーマのひとつになりました。セルビアのスメデレボ市ラーリャ村にあるイヴォ・アンドリッチ初等学校、ヴルニャチカ・バニャ市のポピンスキー初等学校の就学前児童教室、ヴルニャチカ・バニャ近郊のヴルンチ村のムラドスト初等学校の子どもたち、そして「おばあさんの手」プログラム参加者のヴルニャチカ・バニャ、クラリエボ、チャーチャック市に住む難民のおばあさんたちに届けられた日本の子どもたちのワークショップ作品は、心からの喜びで迎えられました。そして、各所でその喜びを形にするワークショップが行われ、日本の子どもたちへの友情を託す返事とも言える作品が新たに創られて日本に帰ってきました。このように、日本の子どもたちの作品は「風の船」に乗ってセルビアまで旅をし、そして姿を変えて戻ってきたように思います。また、これに加え、コソボの聖サバ小学校やボスニアでも地元の子どもたちと、ワークショップはこのツアーで合計9回に及びました。

人間同士の繋がりや私たちそれぞれが持つ心の力の可能性を実感する体験学習の場の提供を目的のひとつとする心理ワークショップは、今回もまたその役割を果たして

くれました。直接出会うことはなくとも、ワークショップ作品を通してこの世界のどこかに友達と呼べる人々、私たちと同じように喜びや悲しみを感じながら生きている人々が確かに存在すること、そして作品制作を通して私たちの中に何かを創り出す力、創り出したい気持ちを感じ取ること、そんなワークショップを通しての交流の積み重ねを、ACCはこれからも大切にしていきたいと思います。



邑智中学校の作品の前で。

1995年の旧ユーゴ紛争終結から14年、99年のコソボ紛争から10年の歳月が流れた今、セルビアの首都ベオグラードの雰囲気は随分変わりました。目抜き通りには高級品を売るブティックが、街角には洒落たカフェも増えたように思います。一方、現地の姉妹団体 Zdravo da ste (以下 ZDS) では、セルビア共和国の社会問題となっている貧困への取り組みを開始しています。復興に伴う貧富の差の拡大が問題になっています。いつの時代も、どの地域でも、社会の復興から取り残されていく人々がいます。実際、今回訪れたラーリャ村、ヴルンチ村は、難民やロマ人たちも多く暮らしており、ZDSの貧困対策プログラムの対象となっている地域でした。ACCでも今後は、ZDSとの協働プログラムとしてこの問題に取り組んで参ります。また、コソボのコソブスカ・ミトロヴィツァ市、ボスニアでも、貧しさと未だ続く民族間の葛藤を出会った人々が語りました。今更のようにひとつの紛争が残す傷みの深さ、その影響の長



さに心を痛めずにはられません。ACCではこれからも、人々と戦争との関わりを通して、人間にとって本当の豊かさとは何なのかを現地の人々、ご支援くださる皆さまと共に考え続け、活動を続けてまいりたいと思います。

今回も例年通り、代表のヴェスナ・オグニェノヴィッチさん、山崎佳代子さんをは

じめとする ZDS の皆さん、セルビア共和国での全行程に通訳として心強いサポートを下さった山崎久さんの協力を得てスタディ・ツアーは実施されました。ご協力くださった皆さんのあたたかい友情に、そして多くの方々との出会いに心からの感謝を捧げたいと思います。（松永 知恵子）

コソボ&ボスニア

今回、最後となるスタディ・ツアーでは、いつものベオグラードやブルニャチカ・パニャを中心としたコースだけではなく、3年ぶりにコソボに、また6年ぶりにボスニア・ヘルツェゴビナにも訪問しました。その模様を報告いたします。

コソボには、ベオグラードに着いた翌日の3月1日、セルビア人とアルバニア人がイバル川を挟んで対立しながら居住する街、コソヴスカ・ミトロヴィツァ/ミトロヴィツァ（アルバニア語表記）にバスで7時間かけて行きました。一泊ではありましたが、ACCに関わりのある方々との再開、また3年前に風の船の作品を持って訪れたエンクレーブ・グラーツェ村にも行くことが出来、とても大きな意味を持つ1日半となりました。2008年2月に行われたコソボ政府の独立宣言により、現在約55カ国の承認を受けて、実質国家としての道を歩みだしたコソボですが、それにより少数派であるセルビア人は、より緊迫した環境下に置かれています。1日の夜に偶然果たされたエンクレーブで教師をなさっているネナ先生との再会の折、お誘いを受けた私たちは、思いがけずグラーツェ村に行けることになりました。翌朝、教師用の防弾ガラスの通勤バスに乗って村に入りました。その道中うかがった話によると、グラーツェ村の小学校の生徒数は10年前の150名から50名まで減少しているということです。そして「水道と電気は1週間後まで来ない」と当たり前のように話す先生に衝撃を受けました。コソボの冬は厳しく、マイナス20度程度まで下がることもあります。

彼らはどのように生活しているのでしょうか。学校に着くと、やはり電気はついていませんでした。しかし、暗い廊下には、

子どもたちの元気な絵が飾ってあります。そして、教室から興味津々で顔を出し話しかけてくる子どもたちの笑顔は、その暗がりと私の心にもパッと明かりを灯すようでした。そこでは、折り紙を使った簡単なワークショップをしました。3年前に会った子どもたちの何人かが成長した姿で挨拶をしに来てくれた時、私たちは「ここに来てよかった、そしてまた来なくてはならない」と強く感じました。3年前彼らと別れる時「まっすぐ育って行ってほしい…」と心から願いました。そして、彼らは強く生きている、がんばって祖国に翻弄された人生と戦って戦い続けていました。私たちは、その環境を大きく変えてあげることはできません。しかし「ここに来ること、来る努力をし続けることで、彼らにエールを送りたい」そう思ったのです。



コソボの聖サバ小学校で

ボスニアは、92年紛争勃発から94年の Dayton 和平合意まで、セルビア人・ムスリム人・クロアチア人による三つ巴の戦いが繰り広げられたユーゴ紛争を象徴する地です。同時にそれまでは3民族が尊重しあって共存し、異民族間の結婚も一番多く、民族のモザイクと言う意味でのユーゴ象徴の地でもありました。



今回は、ZDS の活動に 11 年関わっており、ボスニアのセルビア人地域にあるルドという小さな村で高校の教師をなさっているブラゴエさんにお世話になり、そこを拠点に 3 日間を過ごし、ルドの高校 1 年生と就学前児童、また紛争時に激戦地であったゴラジュデの小学校と 3 つのワークショップを行いました。どれも、ボスニアの美しい自然と文化を紹介した、とても温かい作品になりました。ルドは人口 2000 人ほどで、村人みんなが知り合いと言ったと小さな村です。そして、そこに住む人々皆が、村と人々、それが織り成す文化というものを愛しているということが伝わってきました。ある日、連れて行ってくれた民族ダンスの

夜練習では、年配の先生に叱咤されながら、高校生の男女が真剣に伝統的な民族ダンスを踊っていました。その小さな文化会館は、熱気と子どもたちのキラキラにあふれ、私はそれが始まった瞬間に鳥肌が立ち、なぜだか目頭が熱くなりました。

今回、沢山の方の温かいもてなしを受け、コソボとボスニアから 4 つのワークショップ作品を持って帰ってきました。これらをどう「風の船」として、日本の子どもたちに届けるのか。2 つの地に心からの「ありがとう」を込めて、しっかりと今後の活動につなげて行きたいと思います。

(竹内 めい)

「ともだち、マッ(ト)ピア」・・・ともだち未来便 2008

3 月 9 日バンテアイミンチェイ州プレイダムレイクラウ(※₁)小学校(児童数 520 名)にて、「ともだち未来便」を配布、日舞などの異文化紹介、ワークショップなどの交流活動も行って参りました。以下その様子をご報告いたします。(※₁ クメール語地名カタカナ表記は難しく、これまで様々な表記をしておりましたが、今後はこの表記に統一致します)



日本の「ともだち」からの心のこもった「未来便」を手渡す時間が来ました。初めは遠慮がちだった子どもたちが、「早く!!」とばかりに、どんどん押し寄せてきます。袋を受け取ると、早速ぬいぐるみを取り出す子、ミニタオルを頭にさせる子、子どもたちの興奮が伝わってきます。白い封筒に入ったメッセージカードと折鶴は、各教室

で一人ひとりに手渡しましたが、日本の文字や、折鶴に興味津々の様子でした。



6 年生は、「海をわたって、日本につたえよう」というワークショップに取り組みました。大きな紙に描かれた海と空、日本から用意していった魚と船の形に切り抜いた色画用紙に、24 色の色鉛筆(※₂)で日本の子どもたちへのメッセージを書いて貼ろうというものです。カンボジアの教育課程には「図画」や「音楽」はありません。絵を描いた経験が余りないためか、戸惑う子どもたちもいましたが、何とか作品が完成し、最後にはその作品を全員で取り囲んで、手をつなぎ、日本語とクメール語の両方で「ともだち」と言いました。「ともだち、マッ(ト)ピア」「ともだち、マッ(ト)ピア」、約 60 名の子どもたちの思いが、作品に込めら



れていきました。(※：今回この色鉛筆をはじめ、数多くの文房具を三菱鉛筆株式会社様よりご寄贈頂きました。改めて感謝申し上げます)

6年生は100名近く在籍者がいるとのことでしたが、当日に集まったのは60名余、家の農作業の手伝いのため、また他学年も含め病気による欠席者がかなりいたとのことでした。この学校は午前・午後の二部授業制で、午後の授業を受ける子どもたちは、午前中は農作業を手伝っています。これまでの学校では「未来便」が届く日は「特別な日」ということで全校生徒が参加していました。しかしながら、この地区の生活の厳しさがそれを許さないのでしょうか。参加してくれた子どもたちの中にも栄養状態に問題があると思われる子が目立ち、服装の様子からもこの村の貧しさが並大抵でないことは感じました。

にもかかわらず、家にテレビアンテナがある家があります。電気は通じていないから、発電機が電源。COF(ACCの現地パートナーNGO)代表であるブンラーさんの話によると、「現金収入を物品購入で消費し、貯金ということをしな。現金が必要なときには持ち物を売ってお金を作る。場合によっては家を売ってしまうこともある」とのこと。安心できる金融機関がないだけでなく、内戦中の悲惨な体験がその根底にあることは確かです。

内戦終結から17年、この国には、特に地

方では、まだいろいろな形で内戦の後遺症が残っていることを感じました。ポル・ポト時代に破壊された教育、農地(灌漑システム)、人々の心・・・その回復にはまだまだ時間が必要なのです。



「ともだち未来便」の支援活動は「大海の一滴」。でも継続の中で、カンボジアの人々に小さな希望の光を贈ることができると信じています。支援品のミシンを受け取りに、35℃の暑さの中、4kmの道を歩いてきたバンカック小学校(コンポンチュナン州)の7名の女子児童は、ミシンを取り囲んでその顔を輝かせていました。このミシンが彼女たちの希望の光であることは確かなのです。

「ともだち未来便」を支えてくださるすべての皆様に、心から御礼を申し上げます。
(高橋 喜美子)

Young Hopes 活動報告

クリスマスヴィレッジ報告

1月24日(土)、都内の児童養護施設クリスマス・ヴィレッジを訪問し、昨年10月に続き2回目のワークショップを行ってまいりました。今回は、5歳～15歳までの子どもたち約15名が参加してくれました。ワークショップを始める前に、紙芝居を使ってセルビア・コソボで起きた出来事について話をしました。民族同士が争い始めたことで、今まで当たり前だったこと、例えば家族と楽しくご飯を食べる、友達と外で遊ぶ、

そういったことができなくなってしまった人たちがいるという話を、子どもたちは真剣なまなざしで聞いてくれました。ワークショップでは、そんなコソボの子どもたちが元気になるような、みんなの想いを込めた「クリスマス・ヴィレッジ発、コソボ行き列車」をつくりました。列車の1車両をイメージした画用紙に、好きな絵を描いてもらいました。「コソボの子、ポケモン知ってる？」と聞きながら、ポケモンを描く子。



一生懸命図鑑のカブトムシを写す子。皆、一人一人個性ある素敵な絵を描いてくれました。最後に「じゃんけん列車」という、歌に合わせてじゃんけんをし、負けた方が後ろにつき最後には一列になるゲームをして、皆の絵を糸でつなぎました。絵に「コソボのみんな元気だしてね」と書いてくれる子がいたり、列車ゲームの際「コソボ行き列車発車しま〜す」と歌ってくれる子がいたり、普段であれば聞かないであろう『コソボ』という言葉も、子どもたちが当たり前のように使っていることが不思議でもあり、嬉しいことでもありました。

とても楽しそうにワークショップに参加

してくれた子どもたちですが、どこか他人(ヒト)とのつながりを求めているように感じました。帰り際、「今度はいつくるの?」「またきてね」としきりに私たちに声をかけてくれる子どもたちをみて、ACCが大事とする継続性を強く意識致しました。短い時間ではありましたが、私たちACCの関わりが、子どもたちにとって何か新鮮で楽しいものであったのであれば幸いです。ご協力下さりました養護施設の職員の皆様にも、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。(久米澤 咲季)

クリスマスヴィレッジ感想

今回は久しぶりにワークショップへ参加させていただきました。また、クリスマスヴィレッジを訪問するのも初めてで、子ども達と一緒に私にも本当に純粋に、楽しい時間を過ごすことができました。私達が到着すると、小さい子達は大騒ぎしながらもう私たちに飛びついたり抱きついたり、



クリスマス・ヴィレッジからの贈り物を手に!

おんぶしてもらったりとあっという間に打ち解けるのですが、大きい子達はそんな風には甘えられずなんとなく近くにいたり、施設のスタッフさんとおしゃべりしてたり。けれど、ワークショップが始まると、それをきっかけにどの子も何らかの形でだんだんと参加してくれ、そういう部分にもワークショップのすごさがあるように感じました。私は職業柄、子ども達と一緒に遊んだり、集団でゲームをするという機会はたくさんあるのですが、ワークショップに

はただ楽しい時間を過ごすというだけでなく、何か目に見えないつながりができるように感じます。今回もワークショップの一番最後に、みんなで輪を作り手をつないでという場面があったのですが、一人の男の子が「おれ、やらない」と少し後ろのところに座りながら、私たちの様子を見ていました。私は輪の中でみんなと手をつなぎ、上に上げて「ほら、こうやるんだよー」とその男の子に声をかけていたら「しょうがないなあ」と言いつつも、その子は輪に入ることはなかったけれど、少し離れたところで同じポーズをしてくれました。私はそれがとても嬉しかったし、そうじゃない振りをしていても、やっぱり人って人とつながっていたいなんだなということを改めて感じました。その男の子は、最後私たちを玄関まで見送りに来てくれました。そして「また来るね」という私たちに「おれ、もういいよ、今度別のところに移るから。」と、とてもさりげなく伝えてくれました。それを聞いた時、そうだったんだとなんだか彼の行動が少しわかったとともに、とても切ない気持ちになりました。本当に数時間しか関わることはできないけれど、何かしら子ども達の心に残ってくれるのなら、継続してぜひまた訪れたいと思います。

(望月 しおり)



あけの星学園と「おばあさんの手」プログラム

2月14日、ACC ヤングホープスはあけの星学園にてワークショップを行いました。今回は、ACCの姉妹団体であるセルビアのZDSと、コソボ難民のおばあさんたちとの共同プログラム「おばあさんの手」を、日本の子どもたちにも広げよう、という初の試みでした。「おばあさんの手」とはセルビア在住の難民女性たちが、編物や織物の作品を手作りし、セルビア国内の子どもたちへプレゼントしたり、日本の皆さんに紹介したりするプログラムです。ACCのチャリティ・フェアへお越しくださった方々には既に沢山の作品をご覧頂いているかと思えます。今回のワークショップでは園生の皆さん一人ひとりへ手袋をプレゼントしました。

久々のあけの星におけるワークショップ、少しの緊張と、きっと喜んでもらえるだろう、という期待を胸に、ACCから竹内めい、守山芳樹、遠藤隆太、久米澤咲季と、代表の松永知恵子が行って参りました。初めの導入は竹内が、セルビアの基本情報から難民のおばあさんたちの生活、現状について園生の皆さんにお話しました。そしてこの「おばあさんの手」プログラムが難民女性たちにとってとても充実したプログラムであり、今回はぜひ日本の子どもたちに贈りたい、というおばあさんたちの思いの経緯を伝えました。園生の皆さんは作り手であるおばあさんたちの集合写真をとても興味深そうに見てくれました。手袋の入った紙袋を一人一人に手渡すと、早速中身を取り出して手にはめてくれたり、友達同士で見せ合ったり、色やデザインが少しずつ違い、手作り感溢れる贈り物に、おばあさんたちの温かさを感じてもらえたのではないかと思います。園生の皆さんの笑顔に、なんだか私もほっとしました。手作りの贈り物は誰にとっても特別で、嬉しいものです。

もちろん、ワークショップはこれで終わりではありません。園生の皆さんからもぜひおばあさんたちに元気なメッセージを送

ってもらおう、ということで事前にカードの準備をして行きました。色紙を切ったカードに自由に絵や文字を書いてもらい、片側には小さく切り込みを入れ、そこに園生の皆さんが手袋をはめた写真を差し込めるようにしました。写真はボラロイドカメラで撮った写真をその場で入れてもらいました。写真は嫌がる子もいるかしらと案じましたが、皆さん積極的にポーズを取ってくれたり、友達と一緒に写ってくれました。生き生きとした日本の子どもたちの姿をおばあさんに届けることができるのは本当に嬉しいことです。カードにはカラフルな絵やメッセージを描いてくれました。竹内がセルビア語で「こんにちは」「ありがとう」等の挨拶をホワイトボードに書くと、それを一生懸命写したり、中には手袋をはめた自分の絵を描いてくれる子もいて、このカードを手にしたおばあさんの笑顔が目につかぶようでした。

園生の皆さんが書いてくれたカードはどれも素敵に仕上がり、とても楽しいワークショップとなりました。「おばあさんの手」プログラムは当初、故郷を追われ苦しい生活を強いられる難民女性の方々に、この活動を通してコミュニティのつながりを深め、少しでも生活のはりを感じてもらえたら、という想いを込めて始められました。その活動がまさか日本の子どもたちとの交流につながることは、私たち自身も想像していなかったことでしたので、大変うれしく思っています。今回のワークショップが実現できたのも、あけの星学園の皆様のご協力があったからです。本当にありがとうございました。次回伺う時は、セルビアのおばあさんたちにカードを届けた時の様子を園生の皆さんにご報告したいと思います。遠い日本の子どもたちが写真と共にメッセージをくれたことに、おばあさんたちはきっと大感激だったことと思います。

(太田 繭子)

ほうこく・いろいろ

カンボジアで米の緊急援助を実施します

「ともだち未来便」の現地パートナーNGO

のCOFより、昨年の多雨による米収穫量激減のため、今食糧危機に陥っているバンテ



アイミンチェイ州パイレン地区の窮状が伝えられました。ACC では、通常でも栄養不良の子どもの割合の多い同州の状況をも考慮し、3 t の米の緊急支援を、COF を通じて実施することになりました。支援用の米は、タイ国境での緊張状態のあおりで、タイへの米の販路を失い、経済的に困窮している村から購入することにより、相乗効果をもたらす支援となります。プノンペン市内の米の価格は、高級スーパーでは 5kg5.7\$、庶民的マーケットでは 3.35\$ ですが、生産者からの直接買い付けのため、1 t あたり 215\$ (5 kg が約 1\$) となります。この緊急支援活動へのご理解とご協力を頂ければ幸いです。

(財) 広島・祈りの石国際教育交流財団助成金

途上国の恵まれない子ども達がひとしく教育を受けられる環境を築くため、必要な資金支援を行っている公益法人「財団法人ひろしま・祈りの石国際教育交流財団」より、ACC の「ともだち未来便」に対し、2009 年度の活動助成金として 93 万円の給付を頂けることとなりました。本号掲載の報告書にもありますように、カンボジアの地方農村部の教育環境は、内戦の影をいまだに引きずった厳しいものです。同財団から資金支援により、現地の子どもたちからの要望も高い、教科書、ミシン、絵本等の支援を拡充できますことは、カンボジアの子どもたちの未来へ希望の光をつなぐものであり、本当に有難く存じております。ご期待に添えるよう、日本国内での「ともだち未来便」を通じた「平和教育」プログ

ラムの充実など、更なる「ともだち未来便」活動の発展に力を尽くしてまいります。ご支援に心から御礼を申し上げます。

「さきちゃん英語教室」

あけの星学園での英会話教室は 3 月を打ちまして終了致しました。10 ヶ月という短い間でしたが、園生や職員の方々に沢山のことを学ばせて頂きました。積極的に話し、クラスを盛り上げてくれた参加者の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。どうもありがとうございました。

さて、4 月からは英会話教室に代わって、「学習ボランティア」として、ACC ヤングホープスより 2 名、あけの星学園にてお手伝いさせて頂くことになりました。園生の皆さんの学校での勉強をフォローアップする立場として、今まで通り楽しく一緒に学習できればと思います。

チャリティ・フェア

昨年 12 月 7 日恒例の ACC チャリティフェアが開催され、アトリエ龍のお洒落なジュエリー、日本マイヤー提供の高級鍋類、その他多くの皆様のご好意が結集した品々が会場を飾りました。特にコソボのおばあさんたち手作りの編み物、刺しゅう製品などは今回も大好評、お買い上げ頂いたセーターを着てニコリした写真は、セルビア訪問時、製作者であるおばあさんたちへの嬉しいお土産になることでしょう。皆様の物心両面のご支援より、30 万円を超える活動資金へのご協力が集まりましたことに、心より御礼を申し上げます。

(編集担当: 内田 英子)

ご協力をお待ち申し上げます

会員として、継続的な支援ネットワークにご協力下さい。

個人会員	年会費	10,000	
学生会員	年会費	2,000	
子ども会員	年会費	1,000	
法人会員	年会費	30,000	(円)

送り先

●三菱東京 UFJ 銀行 恵比寿支店
 普通口座番号 1 6 1 0 5 8
 口座名 特定非営利活動法人
 危機の子どもたち・希望

●郵便振替

口座番号 1 8 0 - 0 - 6 9 0 0 4
 口座名 特定非営利活動法人
 危機の子どもたち・希望

特定非営利活動法人
 ACC 危機の子どもたち・希望
 〒150-0021
 東京都渋谷区恵比寿西 2-16-15-102
 TEL/Fax 03-3496-7090
 E-mail forhope@tkk.att.ne.jp